

いしかり 曆

郷土博物館の早期実現を	山口 福司	1
花畔神社の由来	金子 伸久	2
古記録に見る石狩のサケ料理	畑宮清一郎	8
古老談話よりー村山コト氏談	田中 寛	9
幕末時代の鮭漁ー介抱米を主とする	田中 寛	11
当別太美で聞いた話ー本庄陸男のこと	前川 道寛	14
昭和59年度事業から		16
花畔古老昔語り 織田テルさんの巻	吉本愛子	19
「復刻。石狩文学」		24

第 5 号

石 狩 町 郷 土 研 究 会

1985, 3月

郷土博物館の早期実現を

会長 山口福司

住民の多くがその実現を、齎しく待望している施設の一つに郷土博物館がある。ことに私たち郷土の歴史に興味を持つ者にとって切実な願いである。

古書によると、明治に入り札幌が行政の中心となるまで、道央の中心地として栄え、一時「石狩に北海道本府を建つべく経営を為す事」との決議がなされたこともあると云う。また、さらに古くは鮭漁によって大いににぎわったことは広く知られているところである。こうした歴史の歩みからして、多くの歴史的文化遺産が残されているはずである。探せば必ずそうした資料の宝庫であろう。もし、その貴重な資料が陽の目を見ることなく、埋もれ、散逸する運命にあるとするならば、まことに由々しい問題である。祖先にも次代を担う子孫にも申し訳ないことである。

中国の古記に「井戸水を飲むとき、その井戸を掘った人を忘れるな」という諺があるが、まことに以って銘すべきであらう。

郷土博物館の計画については、町の長期計画にも組み込まれ、町理事者、議会、文化財保護委員会等でも理解が深まっている。ことに教育委員会では、その試案まで作られたことがあると聞く。このように、それぞれの機関がそれなりに考えておられるようである。

しかし、実現には急膨張する町情勢に計画はどうしても後手になるようである。だが歴史は一日も待ってくれない。「今日は明日の歴史である」町人口の半数を越す新住民は、この永住の地のルーツを求めている。我が住む郷土に誇りを与えたい。言うまでもなく石狩町を造るのは人である。その人作りにぜひ役立てたい。いま資料の一部は廃校となった学校の教室に収納されているが、これ等をはじめ町内に散在、埋もれている文化遺産を一堂に集め、広く公開できる体勢を早期に整えたい。私見を述べれば、場所は何んと云っても、石狩発祥の地―本町が望ましい。

いまのうちに土地だけでも確保することが急務であろう。建物はいますぐにといても所詮は無理な様であるから、一段階として現存する由緒ある建物があれば保存を兼ねて活かすことも一方法であろう。他の市町村でよく聞くことであるが、心ある篤志家の提供があれば、こんなうれしいことはない。

所蔵物の収集については町内各地区にきめ細かく、博物館協力員などを委嘱して願ひする。整理と管理については、文化財保護委員、郷土研究会員、老人クラブの篤志家等にも願ひすることによって運営すると云う方法もある。郷土博物館建設期成会を作って、基金作りを行うことも大切である。全町民に呼びかけ心からの浄財を基に、我が町の我が博物館をと、住民の熱意をぶつけることが施設作りの最短距離のようにも思う。

識者、関係機関と手を携えて英知を集めて一日も早く郷土博物館を実現したいものである。大方のご支援をいただきたい。

花畔神社の由来

金子 伸久

花畔開村

花畔村は遠く明治四年三月十九日岩手県民八十戸、宮戸より出発三月二十三日小樽着、願乗寺に一泊し石狩に來たり、パナ・ウングル・ヤソツケ（花畔のアイヌ名）に二十戸移住、同年五月開拓使岩村判官騎馬にて石狩に來たり、当花畔を見聞し、五月二十五日岩村判官はパナ・ウングル・ヤソツケを花畔と命名、ついに花畔村開村、明治四年五月石狩道の開削に着手。之より先、寛文一〇年（一六七〇年）には松前の商船が石狩河口より奥地に廻りアイヌとの交易をしていた。（石狩町年表より）

花畔村金毘羅神社創立

こうした事に關係があるのではないかと思うが、花畔村北八線石狩川左岸、通称一本木と呼ばれる楡の巨木のあった辺りに流れ着いた神様を拾い上げたのが、現在花畔に居住している似島政雄氏の祖母に當る人らしいという事を聞いている。その神様が俗称金毘羅様であった。船の神様といい伝えられ、船乗りの信仰する神であり、

似島家で手篤く祀られていた。

明治五年七月、村民申し合わせ、南部団体の一員でもあった簡八十九（子孫は石狩本町に在住）が代拝者となり、祠を建て花畔村金毘羅神社を創立お祀りする事になった。

（註）普通、金毘羅様又は金毘羅大神と称しているのは讃岐国金毘羅大権現の御祭神大物主大神オホムスノオホカミの事である

従つてお祭は九月九日・十日に行なわれる様になった。

明治二十六年四月、花畔村殖民地撰定願いを當時の花畔村總代金子清一郎、山本多藏が北海道庁に提出（長官は北垣国道）、同年六月直ちに認可となり、実施に移したが、之に依り風防林設置、大排水堀削、墓地、花畔市街地割、学校の位置と共に神社の位置も此の時決まった。

花畔神社と改称

明治二十七年八月、花畔村金毘羅神社を花畔神社と改称する事となり、金毘羅大神一字成就の儀式を同年九月十日執り行なわれた。石狩郡親船町外九町三村戸長齊藤皓を始めとし、花畔村總代金子清一郎、山本多藏、組長似島徳太郎、武井三之助、金野徳治、阿部豊藏、祭典世話係、簡八十九、畠山末吉、大場助五郎、大工、三宅由之助、其他村民多数参加して行なわれた。此時の花畔神社受持社掌は石狩郷社八幡神社社司、岡村静雄氏である。

花畔神社一郎新築乃修繕

明治三十三年、花畔神社本殿上家、幣殿新築、及び拝殿修繕を行
つた。

明治三十三年五月十日上棟す。

此建築に参画尽力せし者、次の通り

花畔村総代 金子清一郎・水上藤次郎

組 長 橋本 賢弘・久慈兼三郎・坂井 永吉・

三宅 早吉

神 主 吉成 里盛

木 工 佐藤 和平

建築委員 石井照太郎・佐々木茂平・佐野惣次郎

江部喜太郎・横井 虎藏・中西長左エ門・

南出亥之吉・横田 林平・太田 勇七・

横田 虎雄・松本 鶴藏・小倉 官平・

櫻田 清平・森 佐平・後藤 治助

本殿上家、幣殿新築及拝殿修繕費

収入の部

一、三三円・六八銭〇厘 明治三十三年度収入

一、五〇・二二〇 明治三十四年度収入

一、一四・一二〇 明治三十三年度分未収

合計九八・〇〇〇

支出の部

一、四六円・七四銭一厘 明治三十三年より三十四年九月十一日迄

支払い

一、七〇・〇〇〇 新築請負金渡す

一、二三・〇二五 拝殿修繕に付き前年より経費払うべき分

小計 一三九円・七六銭六厘

差引 五五・八八六 不足

杜格の件につき経費

一六円・四五銭〇厘 総代人より支出し、此の中、二円・三〇銭

〇厘は長部、七〇銭〇は大橋より支出、残金一三円・四五銭〇厘

不足分

残金二口計六九円・三三銭六厘 現在不足金

此支払い四九円・〇〇銭〇厘 氏子総代より立替払

公許の神社創立願ひ

明治三十四年七月十二日氏子二百六十二名、総代金子清一郎・大

橋兵治・長部謙一郎連名にて公許の神社創立願ひを北海道廳に陳情

公許の神社創立願ひ

石狩郡石狩町花畔村

右花畔村は明治四年の開始にして戸数三百有余に及べるも未だ公

許の神社無之に付き、同村北八線二番地に讃岐國金刀毘羅大神の御

分靈を迎へ之を花畔神社と称し永久に維持仕り候間創立の儀御認許

と被成下度此段奉願候也。

明治三十四年七月十二日

豫約氏子二百六十二名総代

花畔村 三十八番地 金子清一郎

花畔村 番外地 大橋 兵治

花畔村北十三線一番地 長部謙一郎

北海道廳長官男爵 園田安賢殿

明細書

石狩國石狩郡花畔村北八線二番地

無格社 花畔神社

一、祭神 金刀毘羅大神（大物主大神）

一、由緒・讃岐國那賀郡金刀毘羅大神ノ分靈ニシテ明治五年七月村

民申合セ、簡八十九代拜者トナリ之ヲ申請スルモノナリ

一、本殿間數、間口壹間 壹坪

奥行壹間

一、拝殿間數・間口四間 拾壹坪

奥行貳間半

一、境内坪數・貳町五反歩

一、氏子戸數・貳百六拾貳戸

一、北海道廳迄・四里拾參丁

明細仕様書（紙面の都合上省略）

御祭神の御由緒

四國金刀毘羅宮の御祭神大物主大神は天照大神の御弟建速素盞鳴神の御子に坐して御母は刺國若姫命と申され、大神は父命の御遺志を承けて夙に大八洲の國土經營に御心をそそがれた。即ち農業殖産

に漁業航海に、医薬技芸に頗る苦心なされ、又人民の夭折する事を憫れみ、医薬・禁厭・温泉の術を始め給う等深く後世大神の余徳を被らぬものは一物もない次第である。花畔神社の御祭神、大物主大神は以上の如き御由緒のある神様でその御分靈をお祀りしてあります。

北海道廳に提出した公許の神社創立願いは直ちに裁下となり、明治三十四年九月九日、花畔神社公認せられ、ついに村社の資格を得たのである。その後の花畔神社神職を司つた吉成多三郎氏は社掌としての在任期間は不明だが、可成り長い事仕えたと言われている。

此の方の墓は花畔村北八線共同墓地に左記の有志に依り建立された。

委員長 後藤 福次

委員 三宅 早吉・佐々木茂平・前坂次右エ門・谷口 鉄蔵・

田口子之藏・吉田常太郎・中野 善平・西尾平五郎・

山下源五郎・長砂 佐平・安達長五郎・小出 恒興・

坂井 永吉・櫻田 清平・岩瀬 嘉七・宮島 弥吉・

鈴木 鍋蔵

有志者 伊藤幸四郎・深田勝太郎・菅原 東作・伊藤 勝松・

林 徳太郎・春木末太郎・林 新吉・岡本 松蔵・

川端藤太郎・金子清一郎・高久 寅吉・田中 満江・

田中 兼松・長沼熊太郎・中野 亮・長野三四郎・

上田 勇蔵・山下 秀吉・舛田佐次郎・松本 鶴蔵・

古川 角蔵・福田松次郎・古島 甚平・小柳勝三郎・

今野 タケ・阿部 徳平・阿部 小平・有田市太郎・

坂本京次郎・齊藤 末人・喜田清五郎・三宅 高助・

宮野 石松・志摩幾太郎・後藤 辰蔵外二百十四名

樽川組 赤山清一外八十七名

吉成多三郎氏の次に神職を司った人は常盤井某氏であるが、此の方は二年程で辞められた。其の後は似島三郎氏（花畔似島政雄氏の父）が花畔神社の管理をして来られた。

昭和五年阿部静蔵氏北八線に住居を移し、農業を経営する傍ら、昭和六年より花畔神社の神職を司る様になった。

花畔神社新築Ⅱ

花畔神社は建築以来長期年月を経過しており、本殿・拝殿・社務所共老朽化し、損傷甚だしき為改築の声があがり、昭和二十七年花畔神社総代長相田石松を中心に氏子総代の会議に依って神社神殿・拝殿・社務所を新築、昭和二十七年八月十日厳かに上棟式挙行了。此の時の神社建築委員は次の通りで、之に花畔神社氏子全員の協力を得て新築された。

花畔神社総代長 相田 石松

総 代 荏津興次郎・織田 丈作・中村三代次・石川原勝美・

似島 一・岩田 元治・釣部 久吉・小西三多良・

織田新一郎・大塚 由松・田中戸一郎

部落会長 相田 六松・織田 義勝・堀 政一・坂井 正明・

小西 茂・坂下 佐市

建築士 青柳 末造

花畔神社宮司 阿部 静蔵

此の時の建築に関係した図面・建築費用の見積書・収支決算書・その他協議・会合等の書類は移転等の時散逸して一切現存していない。

石狩工業団地造成Ⅱ

昭和三十九年末石狩開発株式会社は第一次工業団地として国道二一三号線の東側茨戸川迄、北五線より北九線迄買収され、昭和四十六年に第二次工業団地として国道二一三号線より西側第五号風防林迄北五線より北九線迄買収となり、昭和四十年より石狩工業団地造成に着手した。

此年昭和四十年九月十一日花畔神社総代長相田石松氏急病で逝去、後任に三宅晴源氏総代長となる。又工業団地として土地を買収された阿部静蔵氏も宮司を辞し、白老町竹浦に宅地を求め転居し、其後は石狩八幡神社宮司花田知也氏が花畔神社の祭事を司どる。

花畔神社の移転Ⅱ

昭和四十八年石狩湾新港開発に伴い、新港後背用地として利用の為、花畔村北八線より神社移転の止むなきに至り、国道二二七号線沿い五号風防林続きの大村喜代八氏の所有地、面積二反八畝歩を提供して頂き、昭和四十八年六月一日の佳き日花畔神社新築・上棟式を執り行ない、同年七月三十一日御霊移しの神事を神社委員参列の下に厳そかに執り行なわれた。続いて八月二十六日に社務所建築上棟式が行われた。

此時の神社建設委員は次の通りである。

宮 司 阿部 静蔵

委 員 南出 重治・三宅 晴源・大村喜代八・森本 文男・

内海 雪治・佐藤 正吾・三宅 正良・野本 明・

其田 五郎・小西 茂・加藤 熊吉・増田 重信・

仲村 徳松

尚花畔神社と合祀となった瑞穂神社及び、相馬妙見太田神社について

花畔瑞穂神社は昭和二十六年八月二十九日花畔村五七三番地に社殿を新築し、北海道神宮より大國魂神、大那牟遲神、少彦名命御三神の御分霊を迎え、ついに花畔瑞穂神社が創立された。例大祭は花畔神社と同じ九月九・十日である。

相馬妙見太田神社は明治十五年七月二十三日福島県相馬郡の県社相馬妙見太田神社の御祭神天之御中主神の御分霊を迎え、出張所と称し、花畔村北三線に仮小社を建立し、牛馬家畜の守護神としてお祀りする。明治四十年十月社殿を新築し、相馬妙見太田神社として発足、阿部熊蔵氏神事を司どり春の祭典は四月二十二日、夏の例大祭は七月一日、二日に執り行なわれる。

花畔神社境内に奉納又は移設されている鳥居・灯籠・碑等は次の通りである。

大鳥居 1、武田勇 日支事変出征記念

紀元二千六百年九月建立

大鳥居 2、新道揚水組合

昭和二十六年九月建立

大鳥居 3、開基参百年開町百年記念

昭和四十三年九月建立

石狩町長鈴木興三郎書

花畔開村五十年記念碑 南部利淳伯爵書

紀元二千五百八十年（大正九年九月）

明治三十七・八年戦役記念碑 乃木希典書

明治四十年九月十日建之

戦勝記念灯籠一對 花畔村氏子中

明治三十七年九月十日建之

灯籠一對 杉本武・杉本五郎・杉本清

灯籠一對 林友安

昭和四十三年七月二日建之

狛犬一對 山下定吉

狛犬一對 奉納者名なし

狛犬一對 奉納者名なし 相馬神社より

狛犬一對 花畔村氏子中

明治三十七年九月十日建之

手水鉢 荃津由松・内海竹千代

大正十五年八月十日建之

手水鉢 花畔土地改良区花畔地区

昭和四十八年九月建之

太田神社創立碑・発起人阿部熊蔵

昭和七年七月二日建之

太田神社新築記念碑・長谷川勇・松本利一

昭和四十二年七月二日建之

五柱神社御祭神五柱 花畔村民八十五名

明治三十三年三月二十一日建之

花畔瑞穂神社碑 花畔瑞穂神社氏子中

昭和二十六年九月建之

花畔土地改良区花畔地区解散記念碑

昭和五十年六月二十五日建之

花畔神社々誌碑、三神社五柱守護神合祀記念

昭和四十八年九月建之

国旗掲揚塔 花畔村六号線道路愛護組合

昭和四十八年九月建之

大銀杏二本（樹齢百年以上）原文次郎

昭和 年 月植樹

尚氏子の増加につれ社務所狭濫となり、昭和五十九年三月十七日花畔神社々務所増改築奉賛会設立し、増改築の実行に取掛る。七月七日には厳かに上棟式が執り行なわれ、在来十二坪の社務所を二十三坪増の三十五坪となり、演劇舞台としても利用出来る様にした。

九月十五日例大祭の日盛大に竣工式が行なわれた。

花畔神社々務所増改築奉賛会役員

会 長	内海 雪治
副 会 長	坂井 正明外十名
総務部長	野本 明
副 部 長	林 栄信外四名
委 員	内海 良雄外九名
会 計 長	尾田 久男
副 会 計	石川 信
事務局長	岡田 勝次
次 長	金子 仲久・中川 福光
建設部長	遠藤 秀二
副 部 長	荃津 興一外四名
委 員	中島 淳外九名
財務部長	福田 佐市
副 部 長	下野 興一外六名
委 員	加藤 重興外三十二名
監 事	村井喜久司・相田 次男・池田 泰夫
接待係長	大村 ふみ
委 員	佐藤 良子外五名
顧 問	南出 重治外八名
相 談 役	溝渕 光雄外二十二名
相 談 役	長谷川 勇外九名（町議會議員）

古記録に見る石狩のサケ料理

畑 宮 清一郎

私は少年時代に、祖母（きみ・明治一八年生）から「八歳の時、親に連れられて秋田県から北海道に來た。故郷の船川港（現・男鹿市）から船に乗り、石狩に上がった」と聞かされていた。明治二五年ごろのことで「おしんの時代」よりもっと昔のことである。

それから八五年後の昭和五二年、私は石狩町花畔団地に住むことになった。これも何かの縁（えん）であろうか。

時々、石狩灯台に近い古い市街地を訪れ、石造の倉庫、古い弁天社などを見て歩きながら、祖母が少女時代に足跡をのこした石狩の昔に想いをはせている。

ひっそりとした市街地に、「相原」や「金大亭」など、古い食堂がある。いずれも石狩のマチに古くから伝わる鮭料理の店として「石狩の味」をしつかりと守っている。

さて、江戸時代の石狩は、蝦夷地の奥地への入口であり、鮭の干石場所として栄えたところである。

幕末のころ、蝦夷地を探索した松浦武四郎の「西蝦夷日誌」に

「イシカリ元小屋、他場所にては、運上やと云う。……………」

土産、鮭の多き事は世に知る處、鱒・鮫・桃花魚・チライ多く……川端に辨天社（妙亀法鮫大明神）あり。社殿美々敷立たり。とあり、サケをはじめ、マス、アメマス、ウグイなど豊かな水産物や美しい辨天社が紹介されている。

その昔、石狩名産の鮭は、どのような料理として供されていたのであろうか。

文化五年（一八〇八年）、西蝦夷地高島（小樽市高島）に在勤していた幕府御見付齋藤治左エ門の日記と伝えられる「西蝦夷地高島日記」を開いてみよう。

「イシカリ。此所泊り。……………ここは蝦夷地第一の大湊にて運上屋拾三軒あり。棟をならへ、所により鮭の魚積来り、大船小舟数艘入込、……………数拾軒の市小屋かけなへ、酒店とおもしきも有て、夷人と酒吞、まひ、うたひ繁花の地と見へてにきやかなる事いう斗なし。」

と、大小の船や酒店など、石狩のみなどの賑わいを記したあと、「先風呂に入りて、かまほこに同子をとり肴にしてとり出せり。程なく膳を出す。汁、午房、皿、鮭の塩焼、平、つみいれねき、……………」

と、鮭の塩焼、かまぼこ、筋子などの夕食をとり、翌日は早朝から「汁、院元、平鮭のあんかけ、皿からさけ、香物瓜。膳後また盃を出、肴は鮭のかまほこから鮭をほそく切り、午房の煮付、梅漬など出し……………」

と、朝酒をのみながら、鮭の干物、あんかけ、かまぼこやごぼうの

煮つけ、梅漬けなどを食した、と記されている。

時は移りて、現代の石狩町。「相原」では、ルイベ、ひずなます、いくら、ともあえ、きりこみ、きも、ちゅうの塩から、メフィン、磯辺巻、あんかけなど古くから伝わる鮭料理を供している。

昭和五九年一月、石狩町の人口は四万人を突破した。人口規模でいえば、網走市や根室市に匹敵するという。

「古い皮の袋に新しい酒をもる」のたとえもある。石狩町が古い石狩の文化を大切にし、鮭料理のフルコースを食べる、などの企画で賑う「一村一味」をセールスポイントとした観光のマチとしても発展してもらいたいものである。

（本稿は「北海道の旅と味」（昭和五九年三月号）掲載。

筆者は、北海道文化財保護協会会員。北海道史研究協議会会員。）

古老談話より——村山コト氏談——

田 中 實

次に掲載する「古老談話より」と「幕末時代の鮭漁」は、昭和三十六・七年前ごろガリ版で印刷され郷土研究会会員に配布されたものである。当時は発行数も少なく、また発表されてから二十数年たつため、このような文献があることを知る人も少ないと考えられるので、今回田中實会員の承諾を得て発表当時のまま再収録した。

二編のうち「古老談話より」については、説明を加えた方が良くと思われるので、以下に記す。

話し手の「村山コトさん」は、石狩場所請負人村山伝兵衛の子孫で、初代伝兵衛から数えて十二代目にあたる人である。冒頭の話は、石狩川最大の洪水の話である。石狩川治水促進期成会編の「治川回想」によれば、「石狩川外各支川氾濫、全道で死者二百四十八人、家屋流出倒壊三五五一戸、浸水二四〇〇〇戸」と記録されている。また、石狩町年表（田中實編）によれば、「九月七日、石狩川大洪水、十日、花畔村で平水より約四・七メートル増加。花畔村の立退き、及び床上浸水戸数七六戸、生振村浸水家屋二五〇余戸、生振村の農作物全滅、国庫より救済費支出される（石狩川増水の新記録）」とある。

二番目の話は石狩弁天社にある「妙亀法鯨大明神」縁起。三番目の話は村山家に伝わる鮭の豊凶占い。四番目の話は明治期の弁天社祭祀

の様子と思われる。最後は盆踊りのことで、このうち「津軽おどり」「いやさかさつさ」は現在町内では全くみられないものである。以上

(石橋 記)

明治三十一年十月廿七日

石狩郡親舟外九町三村 戸長 加藤 一魯

田中 伍幣殿

「明治三十一年九月六日大豪雨あり、夜半より七日午前にかけて石狩川増水甚だしく、十日には対雁村の石狩川水標二十七尺一寸五分を示し、石狩川増水の新記録を示せり」

——これについて村山コト氏の談話——

鮭漁に入ってから間もなく大水が出て町では半鐘など鳴らして嚴重な警戒に入りました。道庁より役人も出張して河岸に土俵などを入れたりしましたが、増水は烈しくタライに子供が入って流れてきたり馬なども流されて来たものです。役場裏など長さ約一町位の堤防が欠壊し、缶詰工場の堀十間位と小屋が流失しました。この年は鮭が大漁で一網七〇〇八〇足位入り、西浜漁場では一千石漁獲のお祝いをしたりした位でした。

——資料の裏付け

(以下直筆感謝状)

拜啓 時下益々御清健慶賀ノ至リニ候 陳者客月石狩川出水ニ當リ船場町堤防欠壊ノ際 防禦工事ニ付テハ数日間抜群ニ御働キ〇〇(不詳)爲メニ市街モ大害ヲ免レ候ハ必竟各位ノ奮勵以テ防禦工事ニ御盡力ノ結果ト国家ノ爲メ深ク感謝ニ不堪右酬謝辞申述度如斯ニ御座候 敬具

● 村山家の先祖が石狩川で鮭あみを建てた頃の話、あみをめぐらし曳き上げようとすると、あみが切られ鮭は殆んど逃げてしまう。こういうことが度々続くのでふしぎに思い伺いを立てたら、浜益方面に本拠をおく蝶鮫のしわざと分ったので村山家ではこの鮫を神に祀った。その後は、あみをかみ破られることがなくなり大漁が続いたという。

● それで村山家では今でも鮫は口にしないとの事。

● 村山家では自宅裏山の柏林に稲荷神社を祀り信仰していた。毎年初午の日には赤飯を供え、赤、青、白の張紙を飾ってお祭りしたが、裏山にすむ狐が出てきて供えた赤飯の左右何れの側を食べるかによって、その年の漁の豊凶をうらなったが、これがふしぎに適中したといわれる。その稲荷様は現在地藏堂に祀られている。

● 弁天宮のよみ夜には消防番屋から弁天宮まで角燈が立ち並び札幌から芸者が来て踊った。一般見物人には赤飯をくばったが、その量は米五斗位と思う。

町内で行われた盆踊り

越 後 踊 り……消防番屋付近で踊った

いやさかさっさ……赤石旅館（今の法性寺付近）辺で踊った

盆の十三日ちやほかいする晩だ

小豆こわめしノウ豆もやしヤいやさかさっさ

津軽踊り

“あねこいたかと窓からみたば

ばばのみたくなしチョイト窓しめたサアドッコイシヨく”

以上 文責 田中 実

（昭和二十四年 本人より聴取 当時七八歳）

幕末時代の鮭漁 — 介抱米を主とする —

田 中 実

後松前藩時代（一八二一—一八五四年）石狩方面の西蝦夷地に於ける鮭漁に従事したアイヌの労賃（介抱米）には、米がすべて金の代用として支払われた。石狩場所では春の鯨漁の期間中の給料は、一人玄米八升入が七、五俵、秋の鮭漁期の手当は八升入玄米一人六

俵を最高とし、三俵位まで支給された。亦、春から秋まで通して働いて最高で玄米四斗俵で三俵であった。これの支払い方法は、運上屋や番屋に帖面をおいて働いている間、アイヌのほしいものを渡し、ては帖面に記入しておき秋の終り場所の切上時期に帖面の上で差引勘定をして支払われたのである。

後幕府直轄時代の安政三年（一八五六年）の記録によると、アイヌ（蝦夷）の自主的な網引場が次のとおり七ヶ所四十八統おかれ、外に請負人の漁場がおかれていた。

蝦夷網引場の状態（所部屋記録による）

場 所	網 数	番 人	数 量
ワッカライ	一〇統	与左衛門	和人網共六〇〇石
フル	九 統	重兵衛	三〇〇石
ヤウシハ	六 統	小太郎	二〇〇石
シヒシヒシ	六 統	作十郎	二〇〇石
トウヤウシ	一一頭	吉郎治	四〇〇石
ヲタヒリ			一五〇石
サマロフト	六 頭	啓 吉	二〇〇石

とった鮭は番人により他に勝手に出すことを禁じられ監視されていた。即ち自分の食糧以外は石狩の元小屋へ舟でもっていったが、その場合には番人から鮭の数と家内の数を書いた札を渡され、それを持って元小屋に鮭を届けると、一人に対して飯一杯と濁酒一杯が与えられ、鮭の塩引五束（一束は鮭二〇尾）で米一俵、干した鮭は八束（一六〇尾）で米一俵と交換された。米一俵とは八升入一俵の

ことで、塩鮭一尾と米八勺との交換になる。

酒のほしいものは米一俵の代りに清酒四升、タバコなら四把、木綿類は四尋、その他望みの物と交換ができた。この他一〇束（二〇〇尾）とつた者には清酒一升、二〇束とつた者には二升、三〇束とつた者には三升とほ、うびに酒を出して漁獲高をあげようとした。

次に和人の網引場は、シュップ、ホリカモイ、ワツカライ、ティネ、モシンレフ、バンナクルにあつたが、蝦夷の網引場ができた為、労働者に困り各地から人を集めた。即ち

シュップ 余市アイヌ 五〇人

ホリカモイ 石狩アイヌ 二人（船頭）

他は高島アイヌ二〇人 沙流勇払アイヌ三〇人

ワツカライ 石狩アイヌ 二人（船頭） 一九人

ティネ（石狩町内） 一人（"） 一人

モシンレフ 一人（"） 有珠アイヌ二〇人

上トウヤウシ 二人（"） 一〇人

バンナクル 一人（"） 一〇人

ヒ ト エ 六人（"） 有珠、勇払アイヌ

ボンヒトエ 一人

トエピラ 一六人

タンネヤウシからホリカモイの間に石狩アイヌ六人、忍路アイヌ二十二、古平アイヌ十六人が出稼（石狩アイヌ以外）に来ておつた。

元々石狩川筋にいた者で、和人漁場で働く者はハツサブにいた二

人を加えて二十三人に対し、余市アイヌ五十人、高島アイヌ二十人、沙流勇払アイヌ四十六人、忍路二十三人、有珠三十人、古平十六人計百八十五人が出稼ぎに来ており、七ヶ所のアイヌの網引場では地元のアイヌ二百三十三人が各自の力を尽して漁獲にいそしんでいた。この時代に漁場で働く人々の待遇は前時代より大分改善されたようである。「村山伝次郎履歴大略調」によれば、

役土人役儀給料兼雇土人給人書上

覚

一、米八升入二〇俵 右者役土人之内より春雇給料

夏は樅樫はき自分稼、秋味鮭自分網漁事

一、上男 米八升入二十五俵

夏者樅樫はき自分稼、但冬春中給料共

一、中男 米八升入二十一俵 外に樅樫はき自分稼

秋味鮭自分網漁事 但冬春中給料共

一、下男 米八升入十八俵 外に前同断

右は男平土人春雇給料

一、上女 米八升入十七俵位より十五俵迄

一、中女 米八升入 十五俵位より十二俵迄

一、下女 米八升入 十二俵位より十俵迄

右は女土人春秋二季給料

一、米八升入十五俵

右者木挽土人給料尤秋者自分網引

一、米八升入十俵位より八俵迄

右者男子子供土人春秋手当

一、米八升八七俵位より六俵迄

右者女子子供土人春秋手当

右之通御座候

以上

とある。この外に毎年男一人に、マキリ一丁、女には針五本を手当として渡すことと、鮭漁中は一日に玄米七合五勺を炊出し、その他に濁酒一杯、春の鮭場に出稼に行った場合と、石狩の元小屋に居残って雑用している者には一日玄米五合と外に割鮭などが与えられ、山へ行つて漁具にする木の伐出しか、薪の伐出しに働く場合にも大体これと同じものが給与された。

これらのものが不足なく支給され、又万一の用意の為に上川と中川には干鮭二〇〇束、石狩の元小屋には塩引二〇〇束と筋子一五〇樽、背割鮭三〇〇束、身欠五〇本ずつ常に用意され、その他に米、酒、コウジ、タバコ、木綿などで支給されるのであった。

勿論これは請負人から差出されたかどうか多くの疑問は残る。果してこの書付通り実行せられたかどうか多くの疑問は残る。

即ち安政四年（一八五七年）夏、石狩を巡視した回浦奉行堀織部正に随行してきた玉虫佐太夫の「入北記」に記されたところによると、

「土人取扱不宜次第嚴重御沙汰ニ及ビケル、此場処支配人土人ノ取扱イ以テノ外不宜場所第一トイウベシ」とあることから思われる。

翌、安政五年、四月幕府は阿部屋（村山伝次郎）請負を免じ、直

捌とした。理由としては経営粗雑、アイヌ撫育不充分、銭函・千歳間道路粗末などがあげられたようである。そして各場所を分け、村山伝次郎は出稼ぎとして一部の場所を割当、同業出稼二十余人とした。為に石狩の発展は著しく、数十戸来住し、まもなく一〇〇余戸となり、花街も生まれた。この年の出稼ぎの収納（運上金）は、二、五〇〇両、鮭漁獲は八千石であった。なお同年の運上金は請負人の納めた額に倍したという。

亦、幕府は石狩勤番所を設け、運上屋を本陣と改め、石狩十三ヶ場所を統轄したのも此の年であり、当時の石狩詰役人は水野一郎右エ門（一八五五年、安政二年三月調役として着任）、長谷川儀三郎であり、前年春調役に任命された荒井金助も在勤しておった。

なお安政六年（一八五九年）に石狩場所は再び村山伝次郎一括、運上金一千両、別段上納二百七十一両の請負となり、明治維新によって解消されるまで続けられたことを付記しておく。 以上

当別太美で聞いた話

——本庄陸男のこと——

前川道寛

当別太美といえは本庄陸男の生まれ故郷である。今回は太美の古老から聞いた本庄陸男のことについて紹介してみよう。

「もはや日暮れであつた、闊葉樹のすき間にちらついてゐた空は藍青に変わり、重なつた葉裏にも黒いかげが漂つてゐた。進んで行く溪谷にはいち早く宵闇がおとづれてゐる。足もとの水は蹴立てられて白く泡立つた。深い山気の静寂がひえびえと身肌に迫つた。」

これは本庄陸男の名作、「石狩川」の冒頭文である。明治元年、会津城の落ちると共に伊達家岩手山支藩は一万五千石から、ただの六五石に落され、土籍を剝され、明治四年、開拓集団となり、一時シツプの地に入つたが、土地が悪いため当別に入る。「石狩川」はこの当別開拓に至る伊達家主従の労苦を描いた歴史小説の傑作であり、彼の代表作である。

本庄陸男は一九〇五（明治三九）年、当別太美に開拓農家の七人兄弟の末子として生まれた。父はもと佐賀藩士で一時、県庁にいた

ことのある人で、西当別神社の氏子総代をつとめるなど、太美では相当信用もありインテリの部類に入る人だったようである。本庄一家は明治三十一年当別太美に入殖、明治末年、小島タマさんの話に出てくる商店（雑貨）を入手し、農業以外にも手を広げたが失敗、大正二年春に北見の上渚滑村に再移住した。

陸男は大正十年、上京し青山師範学校に入學、同十四年東京の明治小学校教師となる。しかし、昭和五年教員組合事件で免職、以後昭和九年の解散まで作家同盟の組織に専念し、かたわら作品を発表する。昭和十二年頃から健康を害し、九月静養のため北海道に向かう。このとき長い間、想を練っていた「石狩川興亡の作品化」つまり「石狩川」の資料調査を行なつた。生まれ故郷の太美では駅前の伊藤旅館に泊つたが、アカのレッテルを貼られていた彼は、常に特高の監視付きで、故郷の人々の目も冷たかつたという。

（註）伊藤旅館の主人は伊藤兼松と言ひ、元生振開拓農民だった人である。彼は俳諧を好み、昇月の俳名を持ち、石狩尚古社の社員でもあつた。彼は生振から太美に移り旅館を経営するようになったが、同時に不治の病に伏すようになった。病を得て帰郷した本庄とは共通の話題もあつたのではなからうか。

◎故小島タマさんから聞いた話

タマさんは太美駅前で雑貨商を営んでいた小島金吾さんの奥さんで、御主人は元生振開拓農民だった人だ。タマさんは旧姓青山といつた。話を聞いたのは昭和四十九年で、当時タマさんは八十歳とい

う高齢だったが、その年には見えないほど元気で、記憶もしっかりとしていた。

「実家の青山の家は太美十二線南三号（陸男の生家は十五線南三号）で農家をしていた。明治何年であったか大洪水が起り、私達一家は筏で避難した。その時の避難先が本庄さんの家だった。

本庄さんの家では丁度、芋と小豆を煮て食べようとしていたところで、私たちが行くと早速、「お腹が減ったでしょう」と言って御馳走してくれました。その時の食事のおいしさは今でも忘れることができません。本庄さんのお父さんがもっと食べるように言ってくれたが、親が遠慮するように言ったので食べられなかった。この頃は本庄さんも農家だった。

わたしが四年生位の時、山之井さんという人が店をやっており、そこでアメ玉を三銭五厘買ったことがある。そしたら三十五個もあり友達に分けた。後から親にアメ玉は一銭だけにしておけばと言われた。その店を本庄さんが買われました。

本庄さんのお父さんは九州人で旦那ぶっていた。お母さんはハデな人でいつもお白粉をつけてお店に居た。とても先に立って畠に出るような人には見えなかった。陸男さんは丸顔でメンコイ顔をしていた。

本庄さんの畠は江島さんという人が買った。掘抜ききの井戸を掘るとナマ暖かい水が出てきた。江島さんはここで温泉を始めた。これが今日の太美温泉の始まりです。（註 現在温泉の場所は、江島さんの始めた温泉とは七丁程離れ、経営者も異なっている。）

私はその後、小島家に嫁ぎましたが、不思議な御縁で本庄さんのお店に住むようになったのです。

本庄さんは農業で失敗して、お店をしましたが、それも失敗され、店を矢野さんという人に売りました。ところがこの矢野さんもうまぐ行かず、二年位でその店を私共が買うことになりました。大正二年でしたが、買った値段は三十円と記憶しています。この店は私共が買ってからも一向にはやらず、鬼門の方角だとウワサされました。家の中には本庄という焼判があちこちに押されていました。

店は東向きで下屋がついていました。南側の縁側にガラス戸があつて、当時としては悪い家ではなかったが、東西に並んだ二つの八畳間は古臭く、北側にある納戸は湿って入ることも出来なかった。それから間もなく、この店はコワして建て直しました。」

橋本マツエさんの話

マツエさんは明治三十八年生まれで、太美から生振に嫁いで来た人である。現在、五線南で農業を営んでおられる。昭和四十九年頃と思うが、「本庄陸男さんという名前を知りませんか」とお尋ねするとマツエさんは偶然、陸男と同級生だということだった。

「当時、太美小学校は一、二年で一クラスをつくっていた。陸男さんという人は、背が前から二番目位で小柄、顔は可愛らしかった。店の子だったから式の時は、キレイなカスリを着て袴をはいていた（当時、一般の人は袴をつけていなかった）。勉強は良くできたと思います。」

昔のことだし陸男さんはすぐ転校され、一年位しか一緒に勉強しなかったもので、これ以上のことはわかりませんというお話だった。

小島竜一さんの話

竜一さんはタマさんの長男で、現在も太美駅前で雜貨商を営んでおられる。タマさんの命日にお参りに行き、本庄さん一家の話を聞く。

「岩田正明の婆ちゃんとは本庄さんの姉だったが、その息子が本庄の影響を受けてアカにそまり東京に行ったと聞いている。この人は空農（空知農学校）を出て、東京の美術学校に行ったが、警察に手配を受けていたようだ。その後、応召されアツツ島で戦死した。」

以上、聞いた事を羅列して来たが、私自身それほど本庄陸男について詳しいわけではないので不明な点が多いが、陸男のおいたちについてはすでに木原直彦氏の「北海道文学史」、小笠原克氏の「北海道の文学」、また松田貞夫氏の「本庄陸男・オホーツクの頃」に詳しい。今回もこの三書を参考とした。

今後、さらに詳しく調べ、不明の点を明らかにしていきたい。

昭和五九年度事業から

生振村見学会

九月十六日午後一時、生振村の春光寺前川会員宅にお邪魔させて頂き、生振村の歴史について勉強会を行なった。参加者会長以下12名。生振村は明治四年宮城、山形両県の移民により開かれ、同二十七年には愛知県16ヶ町村の移住者が入ったところである。もとは北生振と地続きであったが大正七年から昭和六年にかけて行なわれた石狩川治水工事によって北生振と分離された。

前川会員のお寺は明治四年創設で道内でも数少ない臨済宗妙心寺派の寺である。参加者一同、本堂に集まり生振、春光寺の歴史について前川会員を講師に勉強。そのあと、前川会員が収集した資料と本尊である釈迦牟尼仏を見せて頂く。釈迦牟尼仏は今年、はじめて台座の部分に「延宝九年」の銘があることがわかったもので高さ五〇センチほどの小形の仏像であるが、おだやかないい顔をしている。また、前川氏の俳句研究のきっかけとなった句額、神燈俳句に使われていた幕は参加者の目をひきつけた。

なお、当日は前川会員の奥さん、お嫁さんに湯茶、また自宅の菜園でとれたスイカまで差入れて頂き、勉強とともに一日、暖いおもてなしをうけて感激しました。ありがとうございました。

浜益村見学会

夜半より雨風が強く、朝になっても風が強い。福田氏より心配の電話。会長と実施するかどうか打合せる。予報では天候回復との事なので一応実施することに決める。

八時、北陽ショッピング駐車場で花川地区会員と待合せ、二台の車に分乗出発する。

河口橋を渡り石狩農協前で高岡の沖本さん、生振の前川さん、吉田さん、長谷川さんと落合浜益へ向った。天候は次第に回復して、海も思ったほど荒れていないので一同安心。はじめての町外見学なので気を使う。

厚田村を抜け、石狩湾ぞいに北上。厚田村安瀬を過ぎルーランで小休止をとる。ルーランは厚田村にいた河合裸石が濃昼峠とともにこよなく愛した所で彼の著書の題名ともなっている。また、石狩にも関係のある「紅燕情話」の主題である紅頭の燕の住むという洞穴のあるところでもある。ルーランを登り濃昼の山を登る。以前ほどではないが、まだ工事中で悪路が続く。木牧、送毛、毘砂別と過ぎ川下に近づく右手に黄金山、摺鉢山が見えてくる。これらはいずれも伝説の山である。

一時、浜益村茂生のはずれにある浜益村郷土資料館に到着。管理人の木村さんに会い館内の展示物を説明して頂く。この資料館は明治30年代建築された鯉漁番屋（白鳥家）を利用した展示施設で鯉漁場関係資料が豊富に、しかも良く整理されている。また、考古資料、行政資料も多い。近ごろ立つ資料館はそれなりに整備され、建

物も不燃で立派であるが、やはり歴史的建物を使った資料館は歴史重さを感じさせてくれる。たしかに、小平町鬼鹿の花田番屋には規模の点では及ばないが、資料管理がいきとどいている点や年間の入館者が年間七千人という点から見て、まず道内でも第一級の生きた資料館といつて良いだろう。

一二時半、資料館を出て近くの郷土料理店三水で昼食の鮭鍋を食べる。ここの鮭鍋は日頃、我々の食べなれている石狩鍋と少し違いサラッとした感じで一風変っていた。どちらかといえば浜鍋のようだった。

昼食後、岡島洞窟を見、川下に向う。

川下では荘内陣屋関係の遺構―陣屋跡、八幡神社、千両堀を見学する。

陣屋万延元年、蝦夷地警備を命じられた山形荘内藩が作ったもので慶応四年の戊辰戦争のぼつ発により放棄されたものである。現在は大手門跡と土塁・石垣が残るだけで、かつては奉行書をはじめ二十棟余りの建物があった当時の面影はない。また、当時陣屋構築用資材を運ぶため多額の費用がかかったとして「千両堀」と呼ばれた運河も水田の水路と見まがうばかりである。

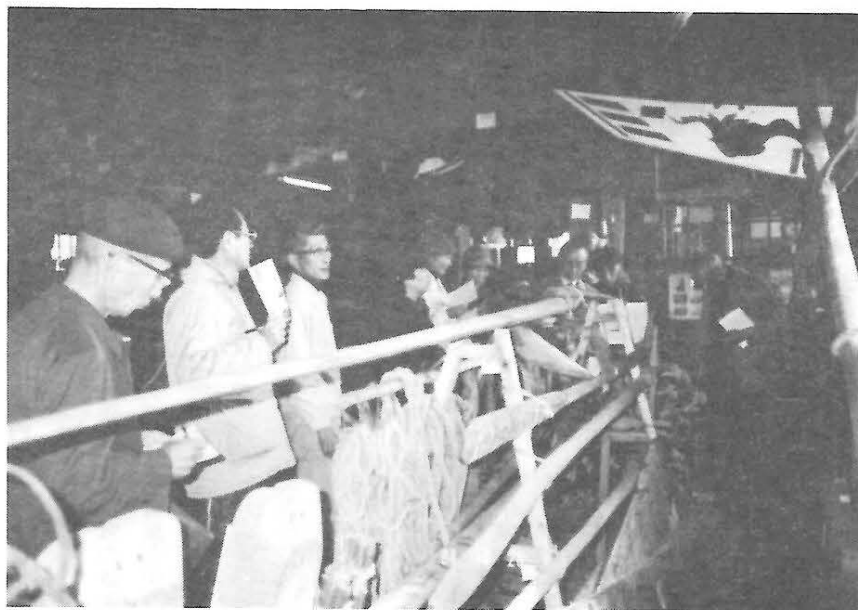
しかし、川下は小田観堂が「荘内藩の開拓のあとをとめおきて、おもふこと多し朽せぬ功績」と詠じたように山形との交流が今もあるという。

陣屋見学を最後に、帰路につく。夕方四時石狩農協前着。ここで沖本、前川、吉田、長谷川の各会員と別れ、全日程を終了した。

今回の浜益村では村教委、郷土館の木村さんに種々お世話頂いた。
心より感謝したい。
(石橋記)



前川道寛氏宅 (S59.9.16)



浜益村郷土館 (S59.10.28)

花畔古老昔語り

— 織田テルさんの巻 —

吉本 愛子

はじめに

最初このお話をお願いした時、「ねえさんわしより年寄りいっぱい居るべー。わしの話なんか面白くも何ともないべさ」と辞退されました。たしかに小学生ばかり三人のお孫さんと暮しておられるテルさんは、まだ元気な農家のおばさんなのです。私が五十三年から織田さんの農作業にパートで通うようになってから親しくお話をする様になったのですがテルさんも時々畑に現われ「おらの名前はおだてるだ！おだてておけばなんぼでも働くぞ」と冗談をとばしながら若い人と一緒に何でもやりこなし、経験豊富なテルさんの仕事は勿論一流。しかも仕事の合間に語られる若い頃のお話がとても面白く、それで私はいつかゆつくりと時間をかけて彼女のお話をきいてみたいと思っていました。生れてから一度もこの石狩を離れたことのないテルさんの思い出話は、そのまま郷土の歴史を知る手掛かりとなってくれるものと思います。読んで頂くとわかるように、とにかく言葉がユニークなので、出来るだけそのまま書かせてもらいました。

— 子どものころ —

テルさんは大正七年九月十四日花畔村北五線で生まれました。新潟出身の田口弥平治、ミツさんの間に生れた四番目の子で、母のミツさんは十八才で嫁に来て四十六才までになんと五男八女の十三人の子宝に恵まれたのでした。花畔一帯がそうであつたように、テルさんの家もやはり極東農場の小作で、五、六頭の乳牛を飼っていて、その牛を飼育する為の燕麦、デントコーン、豌豆などを作っていました。早魃で牧草が採れないと父親は、近くの今井金治郎さんが漁師だったので船を借り生振まで草を刈りに行き、船で運んで与えたそうです。当時北五線から六線にかけて、石狩川沿にヤツメやウグイの漁をする漁師の家が数軒あり、漁師でなくても、鮭の密漁で大金をため込む人もいたという事です。

学校は花川尋常高等小学校の志美分教場で明治三十三年に設置され、当時は四十八坪の小さな校舎で、教室は一つ先生も一人でした。教室の壁一つ隣りはその先生の住いでした。

昭和四年には志美尋常小学校として独立した同校も、昭和五十三年に廃校になり、北三線の当時の校舎跡地には町の記念保護樹に指定されたあかだもの大樹がぼつんと淋しく立っています。この志美小学校は閉校記念誌によりますと美登位小、五の沢小との町内複式校の運営並びに共同研究の要として、その重責を果し本州や道内各地からの視察者が絶えず複式教育界の隠れたメッカであつたと紹介されております。

テルさんのお話に戻りましょう。「一年生に上る時姉さんのお古のマントを着て行った。わしが学校へ行くとテル坊主の歌が流れてね、わしの顔見ると皆馬鹿にしてさ、雨でも降ろうもんなら尚更元気つけて歌ったさ。それがいやでいやでね。わかりますその気持ち。私もよく「アイコノジョオサクソノワケゲンヨ」とさっぱり訳のわからない歌で馬鹿にされたものです。「それでね、何でこんな名前つけたと父親にきいたら、わしの生れた大正七年は旱魃で燕麦の芽がひとつも出なかったんだって。雨が降らなくて、照って照ってそれでテルって付けたんだって。テレビで今年の雨の少ないのは六十何年振りとか言ってたからこの年でないのかい？」今年織田さでは大根、カブ、さや豌豆等を栽培していますがいづれも雨不足の被害をともに受けているようです。

運動場も何も無い学校は、運動会があると生徒は花川小学校まで「そうだね：十日も通ったもうかね」地図の上で見ると五キロ近く歩くことになりました。全学年五十名程が、時には教科書も背負って運動会の練習に通ったそうです。「帰りには、いろいろで焼いた大きなにぎりめしを毎日九線の下水ぶちで食べたっけ。おやつなんか無いから、ぶどうの芽やいたどりの芽を、男も女もみんなして採って食べたもんだった」南線と花川と志美の合同運動会はテルさんが卒業するまで続いたようで、唯一度大正天皇が亡くなられたからと中止になった年があつて「あん時は淋しかった。わしら走れば速かったからいつも選手でした」テルさんの姉妹も皆速かったから「賞品半紙なんか山ほど貰ったもんだった。いも堀り競争なんてものもあ

つたなあ」テルさんより年長の男性がこんな話をしてくれました。「今のヨードンはその頃ヨードカンショーと言ひ本物の鉄砲使用していた」そうです。テルさんがお祭りより好きだったという運動会は「暗くなるまでやったのを覚えている」とか。

生活を支えていた牛乳は道路まで出すと、萩沢さんが馬車で集乳所まで運んでくれました。後には各自で運ぶようになったのですが現在の花畔農協のガソリンスタンドの所にあつた集乳所も、畑作農業から稲作農業へと移行して行つた花畔の歴史と共に昭和三十五年二月の集乳を最後に姿を消してしまいました。

「夏になると、燕麦刈りだ、それ子守りだとろくに学校なんて行かなかつた。それでもちゃんと小学校の免許（卒業証書？）貰ったさ。姉なんか学校へ行きたいって戸につかまって泣いていると、ほうきを食らって、こぶ作って」昔はたとえ子供でもそれなりの労働力を求められ、家の為、生活せんが為に働いた事は言うまでもありません。

昭和三年花畔北十線で二十八町歩の水田が試作され稲作農業へとスタートすると、下の姉は奉公に行き、母親と上の姉が稲刈りの出面に行くようになりました。テルさんは、まだ赤ん坊の弟を背負い五線から十線の田口さんまで、母乳を飲ませに連れて行くのが仕事でした。「学校なんて行つたもんだか行かないもんだか、何せ昼から六号線をそれも裸足でさ、草履なんか編んでくれたって、その頃みんな裸足で歩いてたもんだつたよ。それにねえさん、こんだ晩方になるんだわ秋だから。母さんと帰るって泣いたって、母さんま

だ仕事で……八時頃まで働いていたんだ。また泣く泣く帰ったさ」どこからか叱られての童謡がきこえてきそうな場面です。

「そして今度は晩ごはんの仕度さ。富ちゃん（妹なんてわしが六年の時、母親よりわしを慕っていたものだったよ）そんな子守りに明け暮れた時代がまだまだ続いたのでした。

小学校を卒業する時、十一番目の子が母のお腹にいたので、高等科へ行かせてくれると言っていた父が、一ヵ月二十銭やるから子守りをしてくれというようになり「その二十銭に騙されて高等科へ行かないでしまったさ」その二十銭は毎月郵便貯金にして嫁入りの時持たせてくれました。そういう事は父親はきちんとしていて「お盆になると決まってわしら姉妹の為にわざわざ札幌まで出かけ、花模様の下駄と腰巻きを買ってくれた。毎年ね」

――米づくりが始まって――

テルさんが小労校卒業した昭和六年から志美地区でも水田造りが始まりました。テルさんの母は大きなお腹で畦の土盛りをしていたそうです。「わしらの土地は、平らな所が無いくらいタカベコのまあいひい畑だった。特別だったね……。泥炭地なんて膝上までぬかったり。それを一つ一つスコップでね」大きな仕事は土方と呼ばれる専門の工夫がやったが、その他は、女も子どもも総出で、毎日土にまみれて働きました。「親の苦労は本当に並大抵のもではなかったさ」ここでテルさんは当時の苦労を想い浮かべ、涙ぐみ声をつまらせたのでした。

五町の畑のうち四町を水田にして、秋の稔りに総てをかけていましたが、この年も、翌年も冷害で一反に一俵ぐらいの収穫しかなかったといひます。稲刈りは十一月三日にようやく始まり、晩秋の肌寒さの中での手作業ですから手間もかかります。当然北国の冬は農家の都合などお構いなく駆け足でやって来ます。「納屋なんて無かったから、馬小屋だか牛小屋だ狭い所で、足ふみの稲こぎ機で、ガッタモッタガッタモッタ」それも一ヵ月近くかかったの脱穀でした。

「そしてねえさん、今度風の出るのを待つわけ。風が出たら、雪の上に簾を敷いて風をたたせ細かい藁くずを飛ばして糶にするの」糶摺りは、相田石松さんが発動機で動かす糶摺り機を持って、各農家を廻っていたそうです。「糶摺り機械なんてそんなもの買えるどこで無かったもの」

不作が続き、造田の為の莫大な経費を支払うため、牛を手離す農家が出て来ました。テルさんの家で親牛三頭を売りました。一斗七升も乳の出る赤牛は百二十円で売れ、あまりの高値に部落中が大騒ぎだったとか。ちなみにその頃の米一俵は四円五十銭で、十二、三匹の鮭が買えたといひます。その頃の水田は「直播だったので、豊作といっても四俵ぐらいのもので、何処の家でも十年ぐらいは借金を抱えて、大変だったのではないか」と米作りが軌道に乗る迄の苦難の歴史を語ってくれたのでした。

昭和十三年頃、花畔で初めて松村宇八、坂本邦一、内海雪治の三氏が手製の障子六、七枚で、温床らしきものを作り、苗を育て田植を試みました。その一人私の父（内海）の話によりますと、最初の

頃はそんな手間のかかる事をよくやるものだと言われ、道路を通る人いきこえよがしに馬鹿にされたそうです。

しかし、一反に一斗五升必要だった種籾が三升あればよくなり、しかも収穫量が多い苗床による田植は、次第に認められるようになり、花畔中に広がったということです。

水田になってからは、たとえ冬期間でも牛や馬の世話は勿論、俵編みや縄編みなどで忙しくゆっくり本を読む事も出来ません。二ヵ月間花畔まで裁縫に通った年が二度ありこれが唯一の自分の時間でした。

テルさんが二十二才の時、姉が嫁に行き、働きざかりの弟が敗血症で死亡。おまけに兄が兵隊に召集されてしまいました。テルさんは兄が無事帰ってくるまでは絶対に嫁には行くまいと決意、両親と共に家族を養う働き手となり頑張りました。ところが昭和十九年二月兄安雄さんは戦死。テルさんは既に二十七才になっていました。「わしには娘時代も何も無かった。唯働くために生れてきたようなものさ」とテルさんは淡淡と話されます。

―結婚してから―

この年の五月テルさんは同じ北五線に住む織田義勝さんと結婚。義勝さんには嫁に行った姉と家には六人の弟妹がいました。「その時ねえさん本当にびっくりしたでや。そんな事知る勘定ないべき。隣だだって、今みたいにデートだの何だのって無いもの。戦争中で男なんていないんだ。丁度そこに義勝さんが居たから母親が行け行

け行け行けって」結納金百五十円でした。テルさんが一人暮らしと一人片付き、一人産むと一人分家と、六人の子を産む間繰り返されたそうです。

昭和二十二年北八線に電気がつく事ひなりその電気に憧れて北八線に家を建てました。

弟たちを分家させたり、嫁に出したりで、土地も少なくなり、生活も苦しく、夫は何時の間にか馬喰になっていました。二十七年に種馬を入れ、それを毎年のように買い替えながら十九年間乗ったそうです。「十九年間と口では言うけれどもええさん、その間のわしの苦労は並大抵ではなかった。今でも想えば涙出て来る。田植の忙しい時期と馬の交尾期と重なるので、手伝おうにも手伝われなく、ほとんど家にいなく、おまけに酒が好きで……」

いつの時代にもテルさんのように苦労ばかり多く、ちかも我慢強い女たちが底辺にいて世の中を支えていた事を私たちは決して忘れてはいけなさと痛感しました。

テルさんの長男展嘉さんは、母親の苦勞を見ているので、三十七年に中学を出るとすぐに農業を手伝ってくれました。それにその頃には、耕うん機とかトラクターなどが出て、もう馬の時代では無くなっていったのです。

四十五年夫死亡。長男は立派に跡を継いでくれ、四十七年にはお嫁さんを迎えました。

この年、農業をやめた人が作ってくれと言ってきた田も含め七百八十俵の米を出荷。

―大根作りからの再出発―

しかし時代の流れとはいえ、この時既に石狩湾新港開発地域となっていた織田さんの土地は、手離さなければならず、立ち退きを余儀なくされ、四十八年花畔三六三ノ七通称農住団地に家を建てました。

稲作農業しか知らなかった農家の後継者たちは、これからの生きてゆく道を考えなければならず、運転手、学校用務員、農協職員など様々な職を見つけて散って行きました。

僅かに残った土地で野菜作り転換した家も見られます。織田さんでも最初はえのき作りの共同作業に出ていましたが長続きせず、野菜作りを始めました。五十一年発行の花畔農協婦人会の文集「畔」に載ったテルさんの大根づくりと題した文の一部を紹介します。『私の家は水田をやめてから大根づくりを始めもう四年も経ちます。早いものです――貨物に積み、札幌市場に出荷します。息子が売りに行き、高値はニコニコ顔、安値はシブイ顔、ひと目みればわかる親心。――今日も明日も大根大根大根。一日が暮れる』

こうして大根作りから再出発した展嘉さんは、母親ゆずりの根性と、広い視野を持ち、積極的に新しい農作物を研究しました。その仕事熱心な息子さん夫婦の努力が実を結び、今では三年連続石狩町で一番の農業収益をあげる迄になりました。応接間には三農協青年部連絡協議会の畑作の部最優秀賞と刻まれた金ピカのトロフィー類が数多く飾られております。しかしその五千万円といわれる売上げ

から「パートの給料やおやつ代、肥料代その他の経費を差引くと何ほども残らない」と展嘉さんのお話です。

特に花畔のさや豌豆の二割を占める織田さんの豆畑には、一日平均四十人のパートさんが働いて居ます。殆どが花畔団地の主婦たちで、当別や高岡の畑まで送迎され、こんな所にも昔とは姿を変えた花畔の農業経営が見られる訳です。

まだお若いのに古老の仲間に入れて申し訳ありませんと言うと「いいよ／＼孫は十人居るし老人クラブにも入っているし、お楽しみ会もあるし」そのお楽しみ会とは気の合った仲間十二人が毎月一度お寿司屋さん等に集まり食事をしながらくつろぎの時間を持つ事でもう十年も続いているそうです。

テルさんにとってそれは、必死に働き、幾多の苦勞を乗り越えて、やっと手にした青春ではないでしょうか。「昔は苦勞したけど、今はそんな楽しみもあるし、丈夫なのは何よりも取り得」と明るく語る織田テルさんにお会いした日、久し振りに降った雨が上がり、美しい虹が輝いていました。

石符文学



俳

句



五ノ沢 入野 營

裏作の蕎麦白々し丘の秋
還潮の夜底に唐黍を焼き居たり
此処ばかり蜂の群れ居る野菊かな
紅葉の遅速山居の日の移る

高岡 小山善月

此の一穂吾精根を拾ひあく
此の年の稔り供へて秋まつり
秋まつり吾一族のそろいけり
枯柏雲の去来になり止まず
枯柏雪こぼしつつ雲の去る

更けまさる遠汐騒や村時雨
遠山は夕陽映えて片時雨
駄馬叱る野路黄昏て時雨けり
稲はぎの戸毎のみのり晴れにけり
蜻蛉釣り見越の子等の競ひけり

高岡 平 緋露志

秋季遊草

朝寒や日だまりの鶏に餌をまく
霜がれの紫陽花困う冬隣
そそくさと泥炭積むや夕時雨
野舞台にしぐれも来るや村芝居
稲束に露明りして宵の秋
脱穀の灯かげゆれをり宵の秋
新涼の売ごえ親し鮭市場
初鮭のトラックつづく大漁旗
鮭船の荷役をいそぐ時雨かな
網小屋の灯を消しにけり星月夜

石狩 鷹井青月

陽炎になれし瞳に部屋暗く

十五年 後

日焼の子等残暑の浜の照り浴びて
海に生くる漁師たくまし日焼して

日焼して裸で蟹追う弟の子

涼しさよ長まりて聞く午ラジオ

キビの香に古里の夢深めつつ

余念なくトンボ追う子よ夕焼くる

スイ〜と大気澄ますやトンボ共

事務閑散午の気配や南瓜鍋

櫓音ざわめき鮭の石狩曉ほぐる

高岡 寺内血涙堂

鵜の真似をするや小春の浜鵜 無名庵

匹夫の勇をきそふ寒声 血涙堂

髯の霜秋一瞬に来り去る 善月

野末小さく凍つる朝日 血涙堂

高岡 中路溪多朗

吾歩み

十五才の作

土手長く植ゆる柳や夕静か

雪とけて魚釣る土手や柳さす

五年 後

雨となる風の温みや春の雪

春霖に菖蒲の水の溢れけり

十年 後

百年の知己茲に得ぬ花むしろ

雑詠

泥炭を積む日を蟬の名残かな

蝦夷の秋故山の稲田偲びけり

許されし子の泣きじやくり秋燈下

泥炭を積むや秋晴たたえつつ

つつましく冬にそなえてきのこほす

母よりの便り又来ぬ蝦夷の冬

雪の夜のひそと餅焼く煖爐かな

目も鼻もついで夜吹雪衝く

暁動く樹氷を縫ふて登りけり

樹々はみな氷花に輝るや今朝の凍て

高岡 野坂楓葉

稲の穂の重きそよぎや秋晴るる

童等の晴着々々や秋まつり

秋まつり笑顔で来たり晴着の童

勝名のり笑顔で受けぬ草相撲

蒼空にのぼりはためく秋まつり

納涼の宵にひときは盆太鼓

あで姿ちらりほらりと盆踊り

群トンボ飛び交う径や夕日影

雨去つて虫静かなり天の川

仲秋の月煌々と虫すだく

八幡町 橋本英幸

雑詠

朝の霧深し小鳥の声絶えず

秋暁の水ゆるやかに流れけり

夕映えやはまなすいつもゆれやまず

斜陽に秋を感じる日暮ゆく

行く夏の想ひこめたる日記閉づ

バス走り駒走りここ牧の秋

花畔 福田百合子

野良帰り時雨冷たく頬に打つ

石狩路雨の中くる祭りかな

行く夏を惜しむ心や書に向う

夕暮るる菊一輪の墓地の辺に

石狩 増子秀董

雑詠

毛毯つく子の唄を聞き夕涼み

尺八の音□□と月冴えて

涼をとる頭上に高く蟬時雨

孫だきて背戸に老父は蛙きき
若妻の白き襟足星涼し

蚩呼ぶ子を探し行く月の道
母恋し田植の空やあかね雲
郷愁にふと影させり夕時雨
漁り舟夫の灯近し朧の夜
潮騒も止みて急がし船仕度

高岡 三浦無名庵

晴れの日の泥炭積みを終りけり
鳶の輪の下に泥炭積み続く
断雲の嶺におさまりて秋晴るる
秋天を載る一線や飛行雲
見せ合うて又分りぬ茸狩
雲一朵時雨となりて迫り来し朶
凌ぐ間も無き夕野路の時雨哉
此の朝や菊しおれしと妻の言う
妻と愛でし庭の黄菊のしおれけり

石狩 渡辺千草

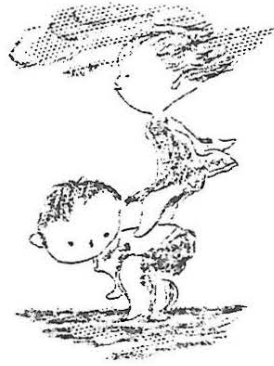
此の秋や講和も成りて国 なる
案山子かと見れば稲かる人なりし
月は今出る粧ひや峯明り
様々に鳴ける虫の名子に教え
通夜の灯の淋しく洩れて虫の声

旅にて

斉藤 全

津軽海峡のまん中
夕暮の空に
からすが一羽飛んでいた。
丸ビル、
二階の右よりの窓
女の子がひとり
針のような月を見ていた。

ふと目覚めた夜半
軒下をひとり行く足音。
御所に近い小路を。



短歌 作品

五ノ沢 入野 誉

稲かけて大根干して野の家の温とくなりし暮の秋かな
ゆく秋や風□々と遠き灯に人懐しく頃となりぬる

石 狩 M ・ H

女われ五色の虹を夢見つつ青青き生命のはやにすぎんか

風吹かば風に耐えん波たば波に耐えん生命のかぎりは
生きんと思う
足もとの砂のくずるる思いする日よ灰色の波のかなたを
じつと見つむる
不潔不純大きな声もて叫びても足らぬ思する日よ
窓に蜘蛛のよぎゆく
大いなるいかりの雲のごとわきいずる日の
晶子の歌の悲しくも華麗なる

高 岡 沖本 澄洋

沖を通う雲よ情熱の紅のはまなすは風に薫れる
草を取る吾に関らず雲のゆく土用半ばの風の畑かな
狂乱の色をあらはに咲くダリヤ情痴の人を偲ばするかな
仄かにもうす桃させる花季薔のときぞ愛しかりける
薫り斯く咲けよと神の宣らす俤に咲きたる花の小さき愛しも
斑雪ある峽の霞の下にして堅香子草の咲くが待たるる
□ふる石狩河口の渡船場に吾を愛する瞳を向けし娘よ
幻を抱きて寝る夜は窓の外の吹雪の音もリズムなし居つ
情熱の香を溢らしめ磯風に咲く玫瑰の花くれない
常になく朝焼けたれば今日も亦雨のふるかと思訝かるる

花 畔 佐藤 信男

夜を醒めて幾度となく煙草吸ふ父の手先の老いましにけり
苦しくも断じて退かじ独学に道拓かんと我は勢ふ
炬燵なる母のうたたね醒まさじと乏しき炭を我がつぎにけり
草山の動くが如く草を負ひ父は山よりかへり来にけり
こともなげに仕事休めと云う医師に我が貧さは明かしかねつも

八幡町 紫 摩 子

亡き人のたましひかへるとつたへきくほんのり待ちおる吾身
いとしや

十歳前背おひてまいりし子等ふしも母よりのびし君よたえよ
夏の夜はみじかきものよゆめさめて今一度まなことぢれど
はるけきはさが野の原に照る月を泪で見つめしをみなありしが
コスモスの茂みの中に唯一りん咲けるつゆくさ誰ぞ召しませ
絶えだえに秋のはじめに鳴く虫は恋のいた手かまたわづらいか

高 岡 千葉 宏平

講和の日を迎えて

新しき基をひらく国ぢから北人我もこぞり起たなん

終戦の翌年生れし典子いま六つとなりて講和迎えぬ

立ち出でて子らと仰ぎし日の丸の眼にしみて見ゆ講和の朝明
講和ニュース聴き入る婦のまなそこの涙を見れば我も黙しぬ
空朗ける講和の旅に鹿島立つ平和使節よつつがなくあれ
海路はるか使命はたせし全権の面輝やかし羽田空港

十月十七日夜斎藤茂吉翁に文化勲章授賜の

ニュース聴く

老いの顔ほころばせつつ参内の君を偲ばゆ文化の佳節
文化勲章受くる茂吉師よ老いの目をしばたき居らん
温顔の見ゆアララギを育てし君のながき道ともに称えん
今日の佳き日に

光栄の報せにむせぶ茂吉師の庵の菊は今咲き盛る

生 振 奈良川太郎

枕頭のガラス戸堅しハラ／＼とボブラこわ葉に秋雨よする
友ゆけりたんば道ずて帰り来て背戸の軒辺にカラス瓜みぬ
ごう／＼と夜更の嵐吹き止まず今朝看護婦の脈とる手熱かりき
意に満たぬ便りききたり秋荒れの松林ゆきたばこ求めぬ
林もる秋も半ばの陽をうけてアカシアの葉は黄ばみてるぬ
金色堂みて歩みはこべば垣ごしにハッキリとラジオ聞えてくる
林中アカシア若木に鈍うてば黄ばみし葉のはら／＼散りぬ

石 狩 南部 秀夫

淋しさを鉄路にのせて万葉の歌ひもとけり雲低き朝
カラ松を組み建てにし軽川の駅に下りたる眉目よき女
書をかかえ明るき林ゆく人のめがねきららと秋の日照らす
あかねさす眩野の風に魂合える友と別れてペタル踏みける
廁への窓に見たりき流れ星御廟の坂のくらやみに消ゆ

高 岡 野坂 楓葉

児等の瞳我に集まる和ごやかと特設授業今始まらんとす
新しき理科実験に子どもらの喜びの顔我に集まる
体育は相撲にせよと我にせまる男の子のたくまじきかな
窓下の虫声かすかボプラ樹の梢にかかる月澄みて見ゆ
ラヂオききつつ窓越しに見る夕月の光は我の面を照らせり
灯を消せばはり窓に映る月明りラヂオの音の澄みてきこゆる
灯を消せば木の間にゆるる月影のさやかに見えて冷氣覚ゆる

花 畔 福田百合子

夕暮れに独り淋しく窓に立ち夜空に輝く星を眺めつ
紅の夕焼時の美しさ赤くちぎれて雲は飛ぶなり

さみだれの軒打つ音もやるせなく何時しか過ぎれる十七の春
川あきてどて草もゆる西国に別れをしみつつ学びや去りぬ
のぞみなき友と知りつつ忘れえぬ君が言葉を日々思い出づ

南 線 福田 和子

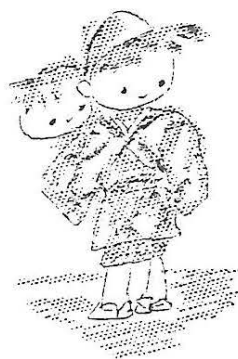
青嵐に映えて紅いはまなすは燃ゆる詩情の北国の花
明くる日のねむき辛さは身に沁めどたゆまぬ歩みふして読む書も
一枚の着物欲せず一冊の書に高めん今日より明日は
絶ゆる事なかれ波風荒れぶとも高き理想の真実一路
嬉しきは一日をつつがなく送り母の笑顔に向ふ夕飼ぞ
情熱の花と語りて歩みしき潮風恋しいつの日かまた

栗沢町青年団大会に臨む

想い出は若き生命をたたえつつ月に歌ひし當火の夕

石 狩 三木山 穰

すが／＼しあしたあしたのさ庭への赤きトマトは露に流れおり
沿道の稲の垂穂は波うちてここ石狩の秋は酣けゆく
潮騒の高鳴る夜は星もなく吾児の寢息に深みゆく秋
手の荒れはたつきの苦だと妻はいうべないつも黙し書を読む
雨しとど浴びて散りにし萩の花さ庭に秋の名残とどめて
人恋しかかる夕べの河風は肌に冷たく星またたけり



詩

教師入門

永松武生

太陽はたしかに一四時

教室の欄間の真中にきらめき懸り

一きわ強烈なまなすの香りが

流れて来ては流れて去る第6時

けれど空は不思議な真空のくらさだし

Ryuzi ♪ Akira ♪ Tutomu ♪

Suzue ♪ Hiroko ♪ Echo ♪

申し合せた沈黙なのだ

あの眼つき……それ……

日軍の宣撫工作にこたえる中民衆の眼の色をして
俺の話術の限りをつくしても

所詮冷たい俺の mechanical な声だけが

貧困を再生産する工場の molar の如く

今日もまた空転し続けるのだ

『Darwin が…… Mendel が…… 馬の化石を…… 進化論……
…… 椿田軌道は…… いいかね…… Kepler だ……』

ああ、なんて暗さだ。どつと襲う疲れ。

これでもかこれでもかと

ふとももに錐をつきさすように

そのくらさと斗う techniques

…… guidance …… test の信頼性 r ……

…… discussion …… 個人差 …… 生涯教育 ……

その労働の山積のかなたで

Kôiti ♪ Satoru ♪ Ken ♪

Mieko ♪ Kiyo ♪ Masayo ♪

沈黙の抵抗をゆるめようとせず

瞳は一斉に真空のくらさの底へ向ってみじろがないのだ

豊に流れてやまぬ母なる石狩は

トイシカラベツの昔より

一遍も変節しない反戦主義者

砂山のかなたからとどろき寄せる潮騒は

Cosmopolitan Cosmopolitan

きびしい風雪は勇気をきたえ

石狩平野うづくまるにはひろすぎる

このさいはてをきり拓いた

はげしいはげしい父祖の血をうけ

進歩と平和を見つめつづける

この石狩の少年達に

あの冷たい被圧迫者の眼を与え

頑な沈黙を課する者が

確かに、確かに居るようだ。

侵略主義は潰え去ったというのに

今ここにその悪徳ののこりかすか

無知、貧婪、退屈、暴力が

保守、尊大、嫉妬、中傷、阿ゝ、虚飾が

大人づらしてまがり踊っているのならば

教師—温和な technician よ

お前の Passion は見当はずれ

落弟生の退屈な答案じゃあないかノ

孤 愁

奈良 広 利

遠い地平の彼方で

物おとがひとしきり

それが又静寂に帰った

“余韻” はいつまでも

つづいていた

赤いもしびのもとで

私は

夕食の大根をきざむ

「石狩文学」に寄す

入野 誉

千葉さんから文学雑誌を発刊する話があった。白髪混りの老書生が、今更、何の文学趣味ぞと思っていたら、其後、八月の日盛に、同士の会合があるという案内状が来た。其時も少々照れ臭い気がし

たが、義理が悪いと思って兎も角も出かけて見た。

会場は石狩小学校の当直室だったが、暑い日なので硝子戸を全部とっぱらったが、それでも汗は流れた。座には鈴木老先生や血涙堂宗匠や御年配の渡辺さんそれに御婦人も一人おられたし、高岡からは千葉さんが一党を率いての盛んな意気を見せられ、それに森山先生や、斉藤先生、田中先生といった顔ぶれであった。

随分暑い日であったにもかかわらず、かれこれの会議などで感じる様なものとは異なつて、涼しい和やかな雰囲気で、こういう潤いのある世界があつたのかと、二十数年もの昔に還つたようなほのぼのとした懐しい気分がした。

理くつの多すぎる世の中。かさかさ干からびた世の中に、住みよい部落や国造りのかけ声は高いが、一向世直しがなりそうもない。

住みよい部落は、国は、潤いのある人の心から生まれてくるのではないかしら。詩もなく、歌もなく、もう幾年か、私も歌を忘れたカナリヤのそれのごとく老いてしまった。生活だ。それでいて、いつも心は楽しもうとしなかった。

文学は余裕の産物として、とうの昔から顧みようとしなかった。勿論、私は文学青年らしい生涯の一こまさえも持たぬ男ではあつたが――。

さて、自他ともに楽しむ道は「芸於遊」という境地だということに判るような気がする。それは清談国を減すていのものであつてはならぬが、自他ともに恰む融合の境地を知る者は幸である。私はその意味でこの企画をなされた方々に敬意を表したい。

少壮気鋭の方々によって灯台の灯はつけられた。暗夜を照らす「石狩灯台」の灯のように。

「石狩文学よ」。郷土の光たれ。



ゆり子の死

奈良 弘利

1

ゆり子、ゆり子と狂気になって走ってゆく女があつた。ゆり子とはあの混血児の名であつた。ゆり子はしっかりと母の手に抱かれていた。ゆり子の母は狂気になって走っていた。はだしであつた。ゆり子は水に溺れて死んだのだ。ゆり子の母はゆり子を抱きしめて、ゆり子の顔をみつめながら狂気になって走っていた。

そこらの人達はみんな戸口に立って騒ぎたてた。でもゆり子の母がたくさんの子供の群と共に町角に消え去った時、話は節句のことになっていた。

ゆり子が死んだと分った時、町にはだれもいなかった。犬ころがどぶにころげ込んでいた。

2

今日あの母は、ゆり子ちゃんのおしりをしたたかなぐっていた。ゆり子ちゃんは泣きながらお母さんにだきついてなおも泣きじゃくった。あれから四時間の後、ゆり子ちゃんは死んでしまった。ブロンドの毛髪をもったゆり子ちゃんの死は、そのブロンドの毛髪ほどの特異性と孤独さをもって消え去ってゆく。

3

ゆり子ちゃんしつかりと、あの母はあの子を呼んだ。いつもはゆり子と呼び捨てにしていたのに。

死という厳肅な事実が今あの子の母をして、ゆり子をゆり子ちゃんと呼ばしめた。

ゆり子ちゃんとは祈りの叫びであったのだ。

4

ゆり子の母は本を読んでいた。

そしてぼんやりして、ゆり子が水に溺れる事をも知らなかった。

そこで人々は言った。

「あの人は本を読む人だからあの子を殺したのだ」
おどろくべき因果の飛躍。

あの連中は気が狂っているのです。

あれはあんまり月を見過ぎたのでしょうか。

昔のローマ人はこう思っていた。

月を見つめるという心境

気が狂うということ

関連性はあってもやはり誤れる因果の構成である。



冬の空

耕堂山人

冬の前ふれのように、時々烈しい驟雨がやってくる季節になると、私は冬の空を連想する。「冬の空」この語の印象は厭な雪ごもりの生活につながっていて、何となく暗い感じを受けるにちがいない。けれども私の生活と冬の空は一つの宿命につながっているのかも知れない。

私という一個人の貧しい生活記録に残るいろ／＼のでき事は（これは微小なことであるが）あまりに多く冬の空と交渉をもっていた。はじめて北海道の土を踏んだ日のけわしい空、はじめて見る大木と取組んで人里をはなれた山の生活の空、雪の中の八雲教会の門をたたいた日の空、友の温い友情に励まされて、東端の新しい土地へ赴任する日の空、青少年時代から、本道二十余年の生活を反省すると冬の空の想い出はつきない。

けわしい、そして荒しい重苦しい冬の空である。けれども私は冬の空を忘れることができない。あのけわしい顔をして狂ったように荒れ廻る冬の空、悪童のいたずらに似た冬の空、柔和なそして愛情そのもののような空、冬の空にも温い心があるのだ。草や木の休息を静かに見守っている冬の空、雪の上にやわらかい陽ざしを投げて元気づけてくれる冬の空。人々はいやな冬の空だと思うにちがいない。けれども冬の空は、いつも乙女のように若々しくてそこには偉

大な芸術がくりひろげられ、絶えず創造されている。

私は、冬の空と共に生きたいと思う。

鮭の街に在りて

南部秀夫

深みゆく秋の一日、うら枯れの砂丘に立てば、威勢のよい鮭獲り音頭は今日も流れてゆく。河面に秋風の立てば沈潜の底から活気にみちてくる不死鳥の街石狩。

行楽の一日を鮭に求める都人は街に溢れ、名産あきあじは貫五五〇円の高値を呼び千円札の束を吹きこんでくる。

しかし果しなき雲の流れに、人無き浜の潮騒いに知る昔も知らぬ憂愁は何故なのであろうか。

茅屋三〇〇を大河の岸に構えて「和人何程のことあらん」と長髪をしごき立つた酋長ハウカセの威風。

「おい、港についたぞー」

光圀北拓の壮志を五〇〇反の帆、二七間の巨大にのせ来たった快風丸船上、意気壮たる水戸藩士の皆。篝火に北斗を焦し数百の土人と酒をくみ交した夜の一刻。

「ハマナスよ、炎ゆる陽の砂丘にありて後の世の人に伝えよ。八百潮の底ひは深く還り来ぬ人を慕いつつ浜に散るピリカメノコの恋

も亦紅と咲く花に負けじ」と。

渚に散ったビリカメノコの憂ある瞳。

鯉潮り来たらず餓えて死せるもの二〇〇を数えた享保の八年。

運上金二五〇〇両に達した安政の五年。

漁獲一五〇万尾、二〇〇〇人の寄留人、遊廊三〇娼妓亦数百、その繁栄ライマンをして嘆ぜしめた明治の初期。

越後、敦賀の大和船八〇艘を並べ、三〇〇\$の缶詰機械が年額八千缶の製品を全国に送り出した明治の中期。

野狐が、イナリ社に供えた赤飯の左右何れを食べるかによって来る秋の豊凶を占ったという話。

網を噛み破る蝶鮫の主を神に祀って禍をとり除き、今日 鮫を食べないという町開祖村山家の話。

鮭の皮の靴を覆き、口で生皮はぎ酒を飲みながら食べたという酋長テロデの話。

一場所千石の漁獲に酒樽を並べ赤飯をふるまい、芝居をよんで祝

ったという大漁話。

これら壺寸のカメラに明滅するものは潮騒いがひもとく石狩三〇〇年の絵巻物、胸奥から微かによみ返ってくる幼き日の寝物語。

追憶は還らざる故にまた懐しい。だが足元にくれてゆくものは凋落の美であり哀愁である。鮭のみでは生活の糧を支えるすべなく、襟元をかすめる河川漁業禁止の声に慄きながら正史の大流に網を投じているのだ。

「鮭よ還れノお前の腹が卵で一ぱいになった時、四年前に下って行った故郷の川に。さ霧の海から百尋の底を恙なく泳いで」と、かつての雄飛地北千島の深海に群なすであろう鮭に望み希いながら。そして増殖への努力は続けられているが――。

今年は還りくる鮭は少なかった。かつて先祖が棲んでいた時の山深い老樹や清烈な砂底も、心なき人々に荒されてしまったからか。一生一度の恋に餌につくことも忘れて還って来ても温い心では迎えてくれないからか。増殖が行われても河川漁業を制限しても、荒れた漁業と豊かな漁場との差異が場所ではなく、網を投ずる漁民の心の中にあることを知らない限り、漁場が真に漁場を愛する人達によって運営されない限り鮭は再び還ってはこないだろう。

昨日は崩壊し明日は予言する。鮭に明けそして暮れ去った石狩三〇〇年の歴史が鮭へのノスタルジアを残しつつ穀倉の石狩への移行

がある時、歴史の分水嶺に立った鮭の街石狩に寄せて、打よせる波が、海面をゆく音が、潮騒いの中から歌の中から、声なき声でささやく。それは何なのだろうか。

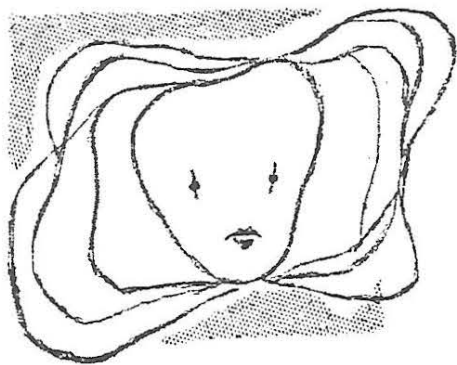
編集後記

ジリ／＼する猛暑の八月十八日午下り、町内文学愛好者の集いがあり「石狩文学」発刊について打合せ、原稿の募集を始めてから既に三カ月有余、白鷹跳梁する厳冬を迎えましたが、この間編集委員斉藤全氏が突然長期研究のため学校視察に本州に出張され、後を託されたのですが、公務多忙を極め、こんなにおそくなつてしまいました。不勉強と不馴れのせいもあるのですが、創刊号の編集など余りに大仕事なので手の下し方がなかったのです。

何卒何人諸兄姉のお許しを願います。

今、この創刊号の御批判、お小言、御希望など忌憚のない御意見を開陳されまして、よりよい「石狩文学」に育てあげたい気持でいっぱいです。

(三木山 稜)



「石狩文学」回顧

田 中 實

八年振りで生地石狩に戻った昭和二十三年春、前年開校の石狩中学校に奉職し二十五年退職するまで組合文化活動や研究会等を通し、またその後も町内各小中学校の文芸にご造詣の深い先生方からご親交を頂いておりました。

当時の町内文化活動状況は、まこと会（本町地区）が機関誌、公開討論会、レコード鑑賞など支庁管内第一級の活動を行っており、本町、高岡地区では併せて会員百名前後という盛会の俳句例会が開かれておりました。

このようななかで小中学校の先生方を中心として文学会結成の機運が高まり、表山・斉藤・千葉・入野先生のご先達による呼びかけにより二十六年八月十八日「石狩文学期成会」が設立され、同年秋「石狩文学」が発行されました。しかし、転勤等相次ぎ続刊に至らず、誌名もその後他市文化団体に使用されてしまいました。所蔵のこの小冊子は戦後初期の激動期に於ける当町文化活動を証する資料価値を一層加えたものになったのです。なお、寄稿者（敬称略）を紹介しますと、入野（五ノ沢小学校長）千葉（高岡小中学校長）小山、平、中路、野坂、三浦（高岡小中）斉藤（志美小学校長）三木山（森山石狩中教頭）永松（石狩中）奈良（生振中）佐藤（花川小）寺内（俳

句宗匠。現町長尊父）善月・澄洋（高岡俳句会員）鷹井・渡辺・増子（東雲俳句会員）南部（東雲会・まこと会・高岡俳句会員・筆者）。

訂正

前号「尾田アサヨさんの巻」で札幌の眼科の名は「階明堂」ではなく「回明堂」の誤りです。

昭和五十九年度 石狩町郷土研究会々員名簿

(理事)	花田 知也	弁天町一
(理事)	前川 道寛	生振村三線北
(副会長)	高木 憲了	花川南二条五丁目一六五
(副会長)	福田 佐市	花畔村北一四線
(監事)	沖本 義久	八幡町字高岡
(監事)	金子 伸久	花畔村北一一線
(理事)	長谷川 嗣	生振村七線南
	吉田 重男	生振村三線南
	田中 實	花川北六条三丁目七
	阿部 徹雄	花川北六条五丁目四
(会長)	山口 福司	花川北四条二丁目一五〇
(監事)	鈴木トミエ	花川北五条三丁目二四一八
(副会長)	駒井 秀子	花川北四条四丁目一六
	岡崎源次郎	花川南一条四丁目八八
(理事)	吉本 愛子	花川北三条四丁目四一
	吉野 惣栄	生振村九線北
(会計)	石橋 孝夫	親船町字ヤウスバ二七一二七
	大島 龍	親船町字ヤウスバ
	黒田 晶子	親船町字ヤウスバ
	畑宮清一郎	花川北五条三丁目六六
	青木 隆	花川北五条二丁目五〇
	村井喜久司	花畔村一七八一四八
	川村 正三	花川北四条四丁目九九

いしかり暦 第五号

昭和六〇年三月三十一日 発行

発行者 石狩町郷土研究会

印刷 (株)さんふう社